

チベット佛典について

——山口益先生の労作を中心として——

稲 葉 正 就

故山口益先生が残された輝かしい数多くの労作の中に、「チベット佛典について」という論文がある。これは、昭和四十二年五月十二日に日本学士院の例会で論文提出として発表されたもので、「日本学士院紀要」第二十五卷第二号に掲載せられた。長さからいうと短篇というべきものであるが、しかし若干の補訂を施して「佛教学セミナー」第六号（同年十月刊）に載せられ、更にまた「山口益佛教学文集」下巻（昭和四十八年五月刊）にも収録せられた。このように三回も活字にせられたということは、佛教学研究においてチベット佛典のもつ重要さを訴えられること切なるものがあつたからであらう。とにかく、わたくしにはこの論文が最も思い出の深いものであるから、蛇足とは知りながらも、いささか述べてみたい。

一 原典としての大藏經と翻譯佛典としての大藏經

原典として、パーリ語佛典とサンスクリット語佛典があつて、パーリ語佛典は南伝大藏經というようにまとまっているが、サンスクリット語佛典は大藏經としてまとめた体裁をとるに至っていない。翻譯佛典としての大藏經として、漢訳大藏經・チベット語訳大藏經・蒙古語訳大藏經・滿州語訳大藏經・西夏語訳大藏經がある。それらの中で、チベット語訳大藏經はその他の諸訳語の大藏經より最も原典的である。そういうチベット語訳大藏經について山口先生は述べようとされたのがこの論文である。

先生が学生のころ深く景仰せられた学長南条文雄博士は、早くよりサンスクリット原典の重要性を宣揚せられていた。以来学界においてサンスクリット原典の読解は次第に行われるようになりつつあった。ところで、山口先生は、もちろんサンスクリット原典を中心として、その上に更に翻譯佛典としての大藏經、すなわち漢訳大藏經とチベット語訳大藏經とを対照する諸訳対照研究という科学的方法をわが国に樹立せられた。この研究方法の芽を先生に熟させたのは、昭和二年から同四年に亘るフランス留学であつた。シルヴァン・レヴィ教授に師事し、ドラヴァレー・プーサン教授などの諸碩学と接触されたことは、近代的な研究方法を充分身につける結果になつた。その頃のわが国では、この新しい研究方法はまだあまり行われていなかった。その原因の一つはチベット大藏經を簡単に手にすることができないことであつた。

ところが、大谷大学図書館には既に最も豪華な版である北京版チベット大藏經が蔵せられていた。夙にチベットへ入つて多くのチベット佛典を入手しようという雄志をいだいた寺本婉雅先生が、明治三十三年夏、通訳となつて北京へ行かれたが、たまたまチベット佛典類を発見し、驚いてラマと交渉し、清朝皇室の特に日本における佛教学研究に

対する好意ある尽力もあり、それを購入することができた。その後、寺本先生は、青海近くのクンブン寺に到り満二カ年勉強し、三十八年五月遂にラサに到着し本望を遂げられた。帰朝後、紺紙金泥の経部と赤字版の経部及び雑部を明治天皇陛下に献上した。そしてまた、北京赤字版チベット大蔵經一揃を当時の真宗大学へ寄付した。それが現在大谷大学図書館に蔵せられているものである。このすばらしい貴重な資料を自由自在に利用できたということは、山口先生にとってまことに幸運であったといえる。ちなみに献上のものは宮中より東京帝国大学図書館へ托せられたが、大正十二年の関東大震災で灰燼に帰してしまった。惜しんでもなお余りあることである。^①

二 チベット大蔵經編纂に至るまでの沿革

a 漢訳佛典伝訳事情

チベット大蔵經編纂に至るまでの沿革のうち、先ず漢訳佛典伝訳事情について述べていられるが、それはチベット大蔵經編纂と殆んど関係がない。それにもかかわらず漢訳佛典の伝訳から述べられたのは、やはり何といってもわれわれに最も親しいのは漢訳大蔵經であるからである。山口先生は、佐々木月樵先生から漢訳佛典の読解を学ばれたからであろう、漢訳佛典の読み方からそれに基づく三論宗や法相宗などの宗義についても相当詳しいものであった。サンスクリット原典やチベット訳佛典を読んでいられる間にも縦横に古来の宗義の解釈を教えていただいたことを思い出す。

b チベット訳佛典伝訳事情

チベットの佛教受容。

チベットにおける佛教伝来の最初については、チベット資料にはみな建国の英主ソンツェン

ガムポ王 (Sron btsan sgam po, ?—649) より五代前のラトトリニェンツェン王 (Lha tho tho ri gyan btsan) の時代に、天からユムブウラガン (Yum bu bla sgai) 宮殿の頂へ宝篋莊嚴經・百拝懺悔經・金塔などが降って来たと記されているが、ゴンポ史 (ka, 20 a, l. 1; Roerich 英訳 p. 38) にはこのことを記した後更に、

「実際には Pandita Blo sems htsho (Buddhiraśita) と翻訳者 Li the se がこれらの經典を持って来たのである、……」

と極めて實際的に追記し、またバクサム史 (Das 出版本 p. 165) にもほぼ同様な記載が見られる。その真偽はともかくとして、大体佛教の伝来というようなことを明確に決定することは困難なことであって、知らず知らずの間に人から人へと伝えられて入ってくるものであろう。しかしながら、ガムポ王の妃として、ネパールの王女と唐の文成公主がチベットへ降嫁したとき、佛像などを携えて行ったという伝説は恐らく事実と考えられている。このような歴史上特筆すべき出来事をもって佛教の公式な受容と見做すより仕方ないことになるであろう。

チベットにおける佛典翻訳の開始。 チベット資料にはみなガムポ王の時代にチベット文字が制定され文法がつくられて、篋莊嚴經・百拝懺悔經・宝雲經などの佛典の翻訳が行われたと述べている。文字がガムポ王の頃に制定されたということは大体正しいようであるが、文法がつくられたと伝えるのは疑わしいようである。^② また佛典の翻訳が行われたということも甚だ疑問である。もし佛典の翻訳が行われたとしても、極めて幼稚なものであったろう。また、ガムポ王から約一世紀後の第四代チデツクツェン王 (Khri lde gtsug brtsan, 在位 704—754) の時代に百業經・金光明經・曆数の書・薬法の書が翻訳されたとプトン佛教史などに記されているが、もしこれらの翻訳が行われたとしても、やはりまだ幼稚な翻訳であったと考えてよからう。これらの佛典の翻訳は現存チベット大蔵經に収録されているけれども、それらは八世紀後半以降の翻訳と思われるから、ツクツェン王時代の翻訳は収録されず残っていないので全くわからない。

さて、ツクツェン王は逆臣のために弑せられ、その子チソンデツェン王 (Khri sron lde btsan, 在位754—797) が十

三才で即位したが、即位してしばらくの間はボンポ教を奉ずる大臣たちによって廃佛政策がとられた。王が二十才に達したとき、王に災いが続いたので崇佛へ転向することになった。^④ 王の誕生が七四二年であったから転向は七六一年のこととなる。王が翻訳事業を行なったのは七六一年以後のことであつたから転向は七六一年の都の長安へ侵入したのは広徳元年(768)のことで、国事多端であつただろうから翻訳事業は更にそれ以後のことになったと考えられる。それ以後の文化事業といえ、七七九年のサムエ寺 (Bsam yas) の建立に注目しなければならぬ。王の第一詔勅に、

「……伽藍フンキドゥッパ(＝サムエ寺)を羊の年(779)春の月の十七日に建立したとき、それより以来チベットに三宝なるよりどころを設けて……」

……gtsug lag khañ lhun gyis hgrub pa / lug gi lo la dphyid zlah bahi tshes buñ bdun la rten btsugs pañi tsho / de nas phan cad/bod yul du dkon mchog gsum rten gtsugs te / ……^⑤

と記されている。ここに「三宝なるよりどころを設けて」というのは、もちろん礼拝の対象として佛法僧を設けたという意味であろう。サムエ寺が建てられて、当然そこに佛像が安置されたであろう。更にプトン佛教史(127 a.; Obermiller 英訳 p. 190) に、

「羊の年に……チベットにおいて僧に適するか適しないか試みのために試みの七人 (sad mi mi bdun) を出家せしめた。」

とあつて、この羊の年も七七九年であろう。もしそうであるならば、サムエ寺が建てられて、そこにわずか六人か七人ではあるが、チベット人の僧伽もつくられた。ここでチベット語佛典ができれば三宝が完備するわけである。そこで王はこの頃から佛典翻訳事業をはじめたと考えられる。プトン佛教史(127 b.; Obermiller 英訳 p. 189) に、

「ダジョルツァンパ寺 (brda sbyor tshans pañ gñ) において編集が行われ (brda sbyor /)……」

とあるのは、この寺がサムエ寺の中に建てられ、そこで佛典翻訳が行われたのではなからうか。とにかく国家の事業として大規模な訳経が開始された。

それでは、サムエ寺建立より以前には翻訳が行われていなかったのであろうか。それについて、古代の翻訳者の伝記が殆んど不明であるからよくわからないが、長沢実導氏の研究^⑦によると、Jñāgarbha というインド僧は、寂護 (Gantarakṣita) の先輩であって、七四〇年頃に入蔵し、七六〇年頃に没したと思われる、十二の佛典の翻訳を行っていたという。それらの翻訳は現存チベット大蔵経の中に収録されている。Jñāgarbha は、父王チデクツェンの晩年に入蔵し、チソンデツェン王の即位の七五四年頃から七六一年に亘る間の廃佛時代の最後の年に没したということになって、少し理解に苦しむが、とにかく、サムエ寺建立より以前にも個々に翻訳が行われていたという例証になろう。

この翻訳事業は、その王の子チデソンツェン (Khri lde sron btsan, 在位 798—815) によって承け継がれた。デンカルマ目録はこの王の晩年八一二年頃に編纂されたというのが定説になりつつあるようである。しかしこの目録の中に、法成 (chos grub) 訳になる漢文蔵訳佛典の名が記載されている。法成が甘州脩多寺で翻訳に従事していたのは八四〇年代の頃であるから、後代に書き加えられたことは明瞭である。デンカルマ目録には、チベット古代における翻訳が殆んど網羅されているから、八一二年以后ランダルマの破佛までに訳出された翻訳佛典の名も記されていると考えてよからう。

ランダルマの破佛。 次にその子レーパチェン王 (Ral pa can, 在位 815—841) が即位したが、余りに佛教保護に熱心であったため、ボンポ教徒に弑せられた。次に立ったランダルマ王 (Glan dar ma, 在位 841—846) は大廃佛を行なったので、佛教徒に暗殺された。ここでチベットの古代史は終わったとするのが定説である。

チベット佛教の復興。

古代王家は崩壊したが、その子孫は四散して各地で小王国をたてた。その一つである西チベットの法皇イェシエオエ (Ye ges po) は、大訳官リンチェンサンポ (Rin chen bzang po, 958—1055) のためにトデインセルカン寺 (Tho lön gser khañ) を建てて、そこで翻訳に従事させた。チベット訳経史において、かれをもって「新訳」(Gsar ma) のはじめとする。一説には、インド僧スマリティジュニヤーナキールティ (Smṛitijñānākṛti) の翻訳をもって新訳のはじめとするものもある。しかしゴンポ史 (Ga l b; Roerich p. 20) に、スマリティの翻訳の方が大訳官のそれより先であるように思われるが、スマリティの翻訳はチベット中央の衛藏地方で行われたのではなく東の辺境のカム地方であったから、その説を採らないという見解が記されている。とにかくリンチェンサンポの翻訳をもって新訳タントラのはじめといわれる如く、かれは極めて多くの密教論書の訳出をなし遂げた稀に見る大翻訳者であった。そこへアティーシャ (Atiśa, 982—1054) が招請されてインドから入蔵してこの寺へ到着し (1043)、しばらくリンチェンサンポと共に翻訳に従事した。古代の翻訳は、国家の事業として訳経道場を提供せられ、インドから学僧を迎えるなどのすべての環境をととのえた中で行われた。いまこの西チベットでは、その小規模なものであったといえる。

この頃には、既にインドへ回教徒の侵入がはじまっていたのであろうが、侵入は主として西インドにとどまり、ナールンダ (Nālanda) やヴィクラマシーラ (Vikramāśīla) などの寺院はまだ無事であった。したがってチベットへ逃避が行われたのは更に少し時代がおくれる。むしろこの時代以降のチベットのロツァーワ (Lo tsā ba, 訳官) たちは、立派な翻訳を多く完成して自分の業績をあげるためには、優秀なインドのパンディタに師事し、優秀なパンディタをチベットへ招請して訳経の協力を得、サンスクリットのよいテキストを多く入手することが必要であった。それがためには莫大な金品をととのえねばならなかった。アティーシャを招くため、西チベットの王室は過重な負担をせざるをえなかった。アティーシャに対する悪評、すなわち「やはり黄金をめあてとして彼ほどのものもチベットにいった。」

という批難はインドにまで及んでいたという^⑨。インドのパンディタは黄金に引かれてチベットへ行つて佛教翻訳を助けたということは多かれ少なかれ否定できない。ゴンポ史 (na 2b; Roerich 英訳 p. 207) に、ドクミのシャーキャイエシ^ニ (rthrog mi gākya ye ges, ?—1064) は、ガヤダラ (Gayadhara) を招請するとき多くの黄金を贈ったが、更に多くの黄金を贈ったのでガヤダラは大へん喜んで Gsum' nag (= Lam bras 道果) を他のチベット人に教えないと約束したという。このような記述が稀ではあるが見られるから、インド佛教の「頭腦の流出」ともいうべき時代であつたと思われる。国家の崩壊によつて、古代のように国家の事業として訳経を行なうことは期待すべくもなかつた。ロツァーワたちは、インドへ行く旅費、優秀なパンディタを招請する費用、よいサンスクリットのテキストを購入する費用などを各個に調達しなければならなかつた。この苦勞を乗り越えてロツァーワたちは佛典の翻訳を続けたのである。

ところが、回教軍の侵入は次第に東にのび、東インド・ベンガル地方は十二世紀末にその支配下に入り、一二〇三年頃にヴィクラマシーラ寺が破壊された。この頃になると全く趣を異にして、インドのパンディタはチベットへ逃避するものが多かつた。その代表的な例として、カシミールバンチェン・シャーキャシュリーバドラ (Kha che panchen gākya gribhadra, 1127—1225) がある。この人はヴィクラマシーラ寺の首座であつたが、破壊される直前に東方オリッサ (Orissa) に逃れ、トプ (Klho phu) の訳官チャムパーパー (Byams pañi dpal, 1173—1225) に迎えられて一二〇四年にチベットへ逃避した。入蔵のときは既に七十八才であつたが、チベットを巡錫して学問を教え布教をなし、また二十数部の佛典を翻訳している。かれはあたかもアティーシャの如くチベット佛教に貢献したが、このようにチベットへ逃れた僧侶はかれだけではなかつたであろう。まさに「頭腦の逃避」ともいうべき時代であつた。

しかしながら、チベット僧チャクのチョェデヘー (Chag Chos rje dpal, 1197—1264) が、一二三四—一二三六年年頃に滿二年間マガダ国に滞在したが、たびたびの回教軍の侵入にさらされ、荒れ果てた光景が展開していた。この頃には、インドにもはやサンスクリット語原典は殆んどなくなり、むしろネパールに残っていたので、かれはそこで購入

している。このチャクの訳官の翻訳目録を見ると、短い成就法(sādhana)や儀軌(vihāra)が多い。この頃になると未翻の佛典は密教関係のこのような短いものしか残っていなかったのではなかろうか。とにかくこの頃を境として佛典の翻訳は次第に少なくなっていった。

チベット大蔵經の編纂。 以上のようにして、数百年間に亘り莫大な佛典がチベット語に訳出され、それらをチベット語訳大蔵經として集大成されることになる。それについては羽田野伯猷氏の詳細な研究があるから参照せられたい。

三 チベット大蔵經におけるインド佛教的性格

チベット大蔵經においてインド佛教が主流をなしている事由について、

(1) **佛典チベット語・Classical Tibetan の性格。** サンスクリット語佛典をチベット語に翻訳しなければならな

かったとき、普通ならば時間というものが自然に語彙や文法を作るものであるのに、そういう時間的な余裕がなかったために人工的に語彙を制定して artificial language を作りあげ、サンスクリット文の上に古典チベット語を貼りつけるように直訳していった。古典チベット語の語彙や文章は、サンスクリット語の「透写」的な態であるということが出来る。そういう古典チベット語であるから、山口先生はサンスクリット語との照応なくしてはよく理解せられないということを常に強調していられた。八一四年頃に、訳語が訳者によってまちまちであっては学習に不便であるからとして、チデソンツェン王の命によって翻訳名義大集が編纂された。以後の翻訳はこれを基準として訳出し、以前の翻訳でこれに合致しないものは訂正された。したがってチベット訳を読むことに熟達すれば、逆に翻訳名義大集によってサンスクリット原文へ還元できる道理である。チベット訳のこの特色を利用して、照応することによってサン

スクリット文における書写の誤りや欠落などが明瞭にわかることが多い。山口先生が校訂出版せられた安慧・中辺分別論釈疏の如きは、終りの数葉を除いて殆んどすべての頁の各行三分の一弱が欠落し、全八五葉中の三葉までも失われたサンスクリット写本をチベット訳によって完備された。もしチベット訳がなかったならば、如何に有能な先生と雖も、なし遂げることはできなかったであろう。それほどチベット訳はインド佛教的でありその価値は大きい。

終戦後、間もない頃に、はじめてわたくしが講義を担当することになった。それはチベット語文法の講義で、山口先生が多忙のためわたくしに譲って下さったのである。そのとき先生はわたくしに、*J. Bacot: Les Šokas Grammaticaux de Thonmi Sambohoia. Paris, 1928.* なる書を示されて、チベット語の本格的な文法研究は、昔のチベットの人が書いた文法学の古典にまで溯って研究しなければならないとアドバイスして下さい。この書は、一八世紀のケエドゥプタムバ (*Mkhas grub dam pa*) の著作である「三十・性入本典善説宝鬘」の原文とそのフランス訳並びに詳細な脚註を付した力作である。一八三四年にチョー・アレクサンドル・コスマ・デ・コーズ (*Alexandre Cosma de Kôrs*) がチベット語文典を刊行して以来、数冊の文法書が出版されたが、みな印欧語流の文法書であった。その中であってバコーのこの研究とこれに基づいて書かれた *Bacot: Grammaire du Tibétain Classique, 2 vols., Paris, 1946—48.* は、東洋語としてのチベット語独自の文法書というべき画期的なものである。このバコーの労作に刺激されて以来わたくしは古典文法学の研究に興味をもつようになった。G. Tucci 教授は教授所蔵の古典チベット文法に関するすべての資料を委譲して下さい。早く研究を進めたいと思いながら雑用に追われて捗らず、教授の御好意に対し申し訳ない次第である。いずれ何とかして完成したいと思っている。

(2) チベット佛教が主としてインド佛教を受容するに至った契機としての一歴史上の事件について。チソンデツエン王の治世中に行われた宗論に関しては、パリにまだ知られていない資料が残っているそうである。それらの資料は早晩学界に登場するであろう。とにかく、最後にインド佛教側が勝ったことは事実と考えてよからう。したがって

これを契機として、チベット佛教は主としてインド佛教を受容することになった。

四 チベット佛典の一特殊性

漢訳大藏經は大体において佛教に関するものの大集成であるが、チベット大藏經は五明に関する研究資料などを収蔵している。そういう点によって学者は、チベット大藏經の特異な性格であるといおうとし、時あつてチベット大藏經の文化的な価値であるといおうとすることすらある。しかし山口先生は大乗莊嚴經論の中に、

「大乗佛教者は五明処に精勤することなくしては、佛教の究極目的に到達しない。」

という意味の文に注目せられた。チベットは、インド佛教の導入をもつて、いわゆる文化国家を形成しようとしたのであるから、この大乗莊嚴經論に提示せられるような大乗佛教実践の理念が、そのまま大藏經の中に展開せられようとしたのではないか、と先生はいわれる。これは早くから先生の持論であつた。この論文を書かれたのも、このことを述べたいということが動機の一つであつたように思われる。

以上、インドとシナとを接合するために挺身した平和的使節たちは、政治的な関わりとは離れた純粹に個人的な宗教的信念に基づいて、数世紀間、途絶えることのない功業を成し遂げた。シルヴァンレヴィ教授のヒューマニズム・ブディクにそういう点が強調せられていると山口先生は繰返しわれている。チベット語訳佛典が伝訳せられた事情はそれとはそのあり方を異にする点もあるが、佛陀釈迦牟尼に対する共通な尊崇の念からインドとチベットとの間を挺身して功業を成し遂げたことは同じである。

ちなみに、先に述べたように大谷大学図書館には早くから北京版大藏經が蔵せられていたので、山口先生は新しい研究方法で自由自在にそれを利用することができた。昭和二十五年に学長になられてからは、佛教学研究のため根本資料を学界に提供する意味から、チベット大藏經を影印版として刊行する計画を立てられた。これは誰が考えても極めて困難な事業であり、もし途中で挫折すれば先生の名誉にもかかわることになりかねない。そこで先生に断念されたほうが賢明ではないでしょうかと申し上げた。すると先生は、「たといお経を一つでも出版できれば、それで本望ではないか」といわれた。出版の大事業は開始され、門下生はみな写真撮影や目次作成のお手伝いをした。数年かけて遂に大冊一六八巻として見事に完成し、いまや世界中の大学や図書館の書架にならべられている。先生はチベット佛典の研究方法を教えるだけでなく、資料として世界中に提供するという功業を成し遂げられた。もはや教を乞うことはできなくなったが、先生の業績は永く学徒の指標となるであろう。

註① 寺本婉雅著・横地祥原編「藏蒙旅日記」（昭和四十九年一月刊）三〇〇頁参照。

② 稲葉正就著「チベット語古典文法学」（昭和二十九年十月刊）一頁参照。改定版も一頁参照。

③ 山口瑞鳳著『三十頌』『性入法』の成立時期をめぐって」（東洋文庫和文紀要『東洋学報』第五七卷一・二号所収、昭和五十一年一月刊）参照。

④ チンデンテン王の第二詔勅参照。G. Tucci: *The Tombs of the Tibetan Kings*. Rome, 1950, p. 98. 佐藤長著「古代チベット史研究」下巻 七七五頁参照。

⑤ G. Tucci 前掲書 p. 96. 佐藤長著「古代チベット史研究」下巻（昭和三十四年十月刊）七六七頁、参照。この文の中に *rtan* が二回使われている。後の *rtan* は礼拝の対照 *method pahi rtan* すなわち *rtan gsum* であろうが、前の *rtan* の意味は、礎石の意か、建物の意か、あるいは *rtan gsum* の中の特に佛像の意かよくわからない。しかしすぐ次に述べる如く試みの出家をさせたということは僧伽をつくったのであるから、礎石だけでなく建物が出来たと理解すべきではなからうか。

⑥ 七人について、G. Tucci 教授は、チベット諸資料を駆使してその名を抽出し対照すると、余りにも出沒異同が甚だしく、古い文献を探究してゆくと実際には六人ではなかったかと思われると結論していられる。G. Tucci: *Minor Buddhist Texts*.

Part II, Rome, 1958, pp. 16—17 及びその前後を参照。

⑦ 長沢実導著「大乘佛教瑜伽行思想の発展形態」(昭和四十四年十二月刊) 参照。

⑧ 上山大峻著「大蕃国大徳三藏法師沙門法成の研究(上)」(『東方学報』京都第三十八冊所収・昭和四十二年三月刊) 一五三頁参照。

⑨ 羽田野伯猷著「衛へのアティーシャ招請」(密教学密教史論文集所収) 参照。

⑩ G. Roerich: *Biography of Dharmasvāmin*. Patna, 1959. p. xliii.

⑪ 羽田野伯猷著「チベット大蔵経縁起」(鈴木学術財団研究年報 1966 所収、一九六七年三月刊)。

山口先生の論文の順序にしたがって述べた。参照していただければ幸である。年代については先生が何によられたか不明であるので、わたくしなりの考えで記した。